

=====

GCOE NewsLetter

[No.30 2010/3/25]

2010年度第1回グローバルCOEプログラム大学院説明会について
gCOE講演会の開催について（再掲）
次回のオープンレクチャーについて
2009年度第2回gCOE論文賞の審査結果
2009年度海外派遣大学院生の調査報告
グローバルCOE講演会の要約
第25回オープンレクチャーの要約
グローバルCOE研究教育員ブリーフィング要約
グローバルCOEスタッフ海外出張報告

=====

■ 2010年度第1回グローバルCOEプログラム大学院説明会について

2010年度のグローバルCOEの活動内容や公募事業について説明会を行います。「大学院学生海外派遣事業」、「グローバルCOE 論文賞」、「グローバルCOE授業科目」等が説明される予定です。皆さんの参加をお待ちしています。

日時：2010年4月7日（水）14時50分～
場所：文学部講義棟237室

■ gCOE講演会の開催について（再掲）

日時：2010年4月14日（水）午後4時30分より
場所：文学研究科大会議室
講演者：スティーヴン・ハリソン教授（オックスフォード大学・古典ラテン文学）
題目："Victorianising Vergil—19世紀の英文学における『アエネーイス』の受容—"
使用言語：英語

■ 次回のオープンレクチャーについて

日時：2010年4月21日（水）18：00～

名古屋国際センタービル15F GCOEオフィス

講演者：佐藤彰一特任教授（西洋史学）

題目：「哲学的解釈学からテキスト解釈学へー歴史テキストを軸にしてー」

■ 2009年度第2回gCOE論文賞の審査結果

グローバルCOE論文賞に応募いただきありがとうございました。

選考委員会での審議の結果、次の論文を顕彰することになりましたので

発表します(順不同)。両論文に対する授賞式と副賞の贈呈式を4月7日、上記のGCOEプログラム大学院説明会に先立って行います。

笠井俊和「English Smuggling Activities in the Official and Private Documents: The “Spanish Trade” and the Logwood Trade from Jamaica in the Late Seventeenth and Early Eighteenth Centuries」

【講評：佐藤彰一】

笠井論文は17世紀後半から18世紀前半にかけての、スペイン領ジャマイカを舞台とする、染料となるログウッドの英国側の密貿易の様相を解明しようとした研究である。1670年のマドリッド条約により、英国とスペインは自国の商船に無許可の新世界での交易を禁じたが、禁令は名ばかりで、密貿易は止むことがなく、英国側では全貿易量の75パーセント以上が、公式の記録には痕跡のない非合法の取引であったと想定する研究者もいる。論者は、新大陸の英領主要港に配置された海軍の出先機関が作成したNaval Office Shipping Listsに記載されている延べ5000隻の船舶データについて、テキスト論的な考察を加え、ヌアラ・ザヘディの所説を基礎に、入港記録がありながら、出港の際の記録が欠けている船舶は、違法にスペイン領西インド諸島との取引に向ったのだと想定する。もともと密貿易という行為の性格上、密輸船の記録は公式の貿易船舶リストには記載されない。著者は非公式でありながら、より直接の記録である船乗りの日記や手紙などの私的な性格の文書を活用して、ジャマイカを舞台にした近世から近代にかけての植民地経済史の重要な局面を、丹念な資料蒐集と、分析の工夫を凝らして、描き出すことに成功している。

エミリ・ボルドナヴ「Japonisme, de l'art a la litterature : Pour une presentation des concepts et phenomenes d'influence」

【講評：重見晋也】

本論文は、19世紀後半のフランスにおいてジャポニズムと呼ばれた文化現象を取り上げ、従来美術史学の領域を中心に行われていた研究と一線を画し、フランス文学との関わりにおいてジャポニズムを再検討し、日本芸術がフランス美術および文学に与えた影響という観点から、その文化的コンテクストと形式論的特徴について論究したものである。論者は、19世紀中葉において詩人ボードレールが示唆した総合芸術という理念を実現する過程の中でジャポニズムがフランスにおいて受容・解釈されてきたとの仮説を提示した後、19世紀後半のフランス美術・文学における閉塞状況を指摘する。その上で、Jing-Larなどのような画家と文学者との個人的なコミュニティの存在を指摘し、芸術家だけに限らず文学者達もまたジャポニズムに形式論的な影響を受けたことを、象徴主義や高踏派の詩人達の創作、ゴンクール兄弟のManette Salomonにおけるパリ描写などを例に取りながら論証している。個々の文学作品に対する踏み込んだ分析は必ずしも十分とはいえないが、文化的コンテクストについては画家や作家間の交友関係を丹念に追うとともにフランス文学に与えた形式論的影響についても、散文・韻文を問わず例を挙げて論証している点は評価できる。今後より詳細に資料収集と作品分析を進めることで、研究を深めていくことが期待される。

■ 2009年度海外派遣大学院生の調査報告

山下英夫さん（仏文学）の調査報告を下記に掲載します。

「フローベールの怪物性の解釈に関する文献及び草稿の調査」

グローバルCOEの海外派遣プログラムで2月4日から3月16日まで渡仏し、博士論文のテーマであるフローベールの怪物性の解釈に関する調査及び資料収集をする機会が与えられた。

派遣先は国立図書館フランソワ・ミッテラン館とリシュリユー館である。

フランソワ・ミッテラン館ではロマン主義に関する文献調査を行った。指導教官より、日本ではロマン主義の孕む怪物性を扱った文献が乏しいことからそれに関する資料収集にあたるよう指導を受けていたので、ジョルジュ・ギュスドルフ（Georges Gusdorf）の浩瀚な論文、Dieu, la nature, l'homme au siecle des lumieres、Du neant a Dieu

dans le savoir romantique、L'homme romantique、そしてLe savoir romantique de la natureを参照し、怪物性が「グロテスクに対して過剰」なものであるという点に留意し読み解いていった。そして重要と思われるところはコピーを取った。これらの論文では、『ボヴァリー夫人』の中に描かれる近代人と対照的なエマの怪物性をなすロマン主義的傾向が科学的、歴史的、宗教・哲学的に考察されており、フローベールの描いた一時代の習俗における近代とロマン主義の持つ相対的な怪物性を解釈学的に多方面から検討するための資料が多数収集できた。

また、リシュリュエ館はフローベールの初期作品の草稿をほぼ完全に保管しており、それらのマイクロフィルムを閲覧し、今までになされた研究の実証を試みた。多くの初期作品においてフローベールは「宿命」を非情な怪物（＝神）ととらえているが、その怪物である宿命が如何に構想され、作品に組み込まれていくのかUn parfum a sentir ou les Baladins、La Peste a Florence、そしてRage et impuissanceを対象に調査した。同様にサタンが象徴する「永遠」や、「深淵」、「死」の観念についてはLa Danse des morts の、また後年『ボヴァリー夫人』で扱われる汎神論的自然と近代が生み出した怪物（ブルジョワ）の原型であると考えられる、個々の怪物として描かれた魂と肉体についても、それらの背反が何を意味するのかReve d'enferの草稿で調査した。以上の調査から生成過程が明らかになっただけでなく、抹消された箇所や書き込みから決定稿では読み取ることのできないデータを収集することができ、フローベールの怪物性の解明への手がかりとすることができた。

両国立図書館で収集したこれらの資料を総括的に分析し、博士論文の執筆に反映させていきたい。

■ グローバルCOE講演会の要約

講演者：黄 一農 教授（台湾国立清華大学）

題目："Cultural interaction between East and West"

日時：2010年2月23日（火）午後3時より

5時10分

場所：文学研究科127講義室

本年度、台湾国立清華大学人文社会学院と名古屋大学大学院文学研究科との間に博士後期課程を中心とした学術交流協定が締結されたことを記念し、台湾国立清華大学人文社会学院教授で歴史研究所所長にして台湾の最高学術研究機関である台湾中央研究院院士の黄一農教授を招聘して、2010年2月23日午後3時より

"Cultural interaction between East and West"と題して 講演会を開催した。

黄教授は講演で、「天主」，「火砲」，「妾」をキーワードに，16-17世紀の中国におけるキリスト教の伝来を例にとり，西欧文化の導入とその受容に関連する文化接触の問題を取り上げた。

明朝中国へキリスト教が，西欧において開発されていた最新の大砲 技術とともに伝来した。その上で，この大砲技術が呉郷之変（1631）においてポルトガル軍に支援され砲兵隊を束ねていた明の將軍孔有徳が清軍に降伏することで最終的に明朝の終焉を決定づけたとする。さらにこの孔有徳の隊の多くはカトリックであったとし，キリスト教が中国の歴史に与えた影響を，技術的および文化的側面から明らかにする。当時中国におけるキリスト教は，特に政府・軍事エリート層を中心として大きな影響力を行使するに至っていたが，その受容において文化的障碍も存在していた。中でも社会的に地位のある人物が「妾」をとるという儒教的習慣は，家制度の存続を支える重要なものであったが，一方でキリスト教においては一夫一婦制が基本であって，婚姻概念の文化的相違がキリスト教の中国伝播に厳然として立ちはだかっていたと主張する。多くの知的エリートはキリスト教に改宗するものの蓄妾の習慣は捨てなかったが，キリスト教と儒教の相異なる要請の間で苦悩した王徴らの例もあり，中国におけるキリスト教は，特に第一世代の信者においては「儒教化したキリスト教」という特徴を持つようになる。

講演の後半は，映画の脚本のように王徴という人物に焦点を当てたもので，中国史を専門としない聴衆の興味も喚起するものであった。質疑応答では講演内容について歴史研究者から専門的な質問があり，黄教授からは根拠となる資料が示されるとともに資料が不足しているという研究状況の説明があった。

（文責：重見晋也）

■第25回オープンレクチャーの要約

2010年2月10日（水）18:00～19:00

名古屋国際センタービル15F GCOEオフィス

講演者：ローラン・ビバル教授（エセック経済商科大学院大学、通称ESSEC）

題目：「歴史の終わりの問題性について」

フランシス・フクヤマの著作によって「歴史の終わり」は人口に膾炙するようになった。フクヤマは、ロシア生まれのヘーゲル研究者であったコジエーヴを参照しながら、ベルリンの壁の崩壊とともに訪れた冷戦の終焉によって、これまでの世界

の歴史の原動力ともなってきたイデオロギー対立や階級闘争が基本的には終焉し、もはやそうした大問題の消滅したポスト歴史の時代に人類は入った、と説く。自由民主主義の法治国家を越える理念はもはや存在せず、この国家の下で諸個人は皆みずからの個性において平等に承認されるからである。コジェーヴは、ヘーゲルの主人と奴隷の弁証法を世界史に適用して、主人とは動物と違って、自らの名誉や尊厳のために命を賭す存在であり、奴隷は自らの生物学的生命のために死を回避し延命を図る存在であるが、人間の歴史は主人と奴隷の認知を求める闘争の歴史であったと考える。個人が市民として普遍的に承認し合う法治国家が登場すると、この闘争の原動力であった主人と奴隷の弁証法は姿を消してしまう。その結果出現するポスト歴史においては、もはや言うべきことはなく、なすべきことは既になされている。何故なら各人は既に、自動的に、普遍的に認知されているからである。しかし、この無意味が跳梁するポスト歴史においてこそ、人間は自らの生の誕生とその可能性の極限をめぐる自意識にはじめて目覚めるのではないだろうか。

(文責・松澤和宏)

■ グローバルCOE研究教育員ブリーフィング要約

第20回ブリーフィング (2010年2月18日)

杉山奈生子「アントワーヌ・ヴァトーの雅宴画と会話文化～文化的コンテクストからの図像テキスト解釈～」

フランスの画家アントワーヌ・ヴァトー (1684-1721) が創始した雅宴画は、神話や聖書等を題材とした物語画 (歴史画) と異なり、文学的典拠に乏しく、彼に関する一次資料が比較的少ないことから、明確な主題解釈は困難であるとされてきた。本報告では、ヴァイダルの著書 (Mary Vidal, *Watteau's Painted Conversations: Art, Literature and Talk in Seventeenth-and Eighteenth-Century France*, 1992) を手がかりに、新たな解釈への展望を提示する。当時新しく確立した会話文学を傍証として、ヴァトーのあらゆる作品の主題を会話 (conversation) とした彼女の主張は、拡大解釈の感は否めないが、一部の雅宴画には適用可能であると考えられる。特に、「些細なことを高貴なマナーで話す」と会話の作法書で語ったスキュデリ嬢の言葉は、伝統的な物語画の高尚な主題ではなく、当世風の男女の愛の営みを優雅に表象したヴァトーの雅宴画のモードに通じており、会話文学やサロン文化というコンテクストから雅宴画を解釈することへの妥当性を裏付けるものである。

■ グローバルCOEスタッフ海外出張報告

池内敏 (gCOE事業推進担当者・日本史学)

朝鮮王朝期古地図研究に関わる文献収集

2010年2月22～24日、韓国国立中央図書館

昨年9月にプラハ・カレル大学で開催された国際研究集会で「于山島考」という題目で研究報告を行いました。その後、一部内容修正をして、同年11月に韓国海洋水産開発院主催の国際シンポジウム「独島と海」でも「于山島考」という研究報告を行いました。二つの報告と討論を踏まえて、さらに補訂したものが近くプラハ国際研究集会報告書に掲載される予定です。ここで検討しているのが、朝鮮古地図に特徴的に現れる「于山島」なる島が、朝鮮半島周辺に現存する島のいずれに該当するか、です。韓国では「于山島」を今日の「竹島／独島」に当てはめて考える傾向にあります。拙論ではそうした見解に懐疑的です。今回ソウルの国立中央図書館で行った調査は、この議論およびこの議論と密接に関わる問題群に言及した韓国人による最新の研究成果や関連文献を入手してきたものです。

記事の本文中、フランス語のアクセント記号は省略しました。

次回のメール版NewsLetterの発行は2010年4月中旬を予定しています。

• •

GCOE「テキスト布置の解釈学的研究と教育」

Hermeneutic Study and Education of Textual Configuration

<http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/>

NewsLetter No.30

発行：GCOE編集部

編集担当：鎌田隆行

Copyright(C) 2010 NAGOYA UNIVERSITY, GRADUATE SCHOOL OF LETTERS

• •